百々裏話（16）

―七小町のことなど―

おもてあきら

さきごろある人から、〝七小町というのはどの曲とどの曲ですか〟と問われた。そんな呼び方があることも知らずにいたので、その時は返答ができなかつた。気にかかつて、あれこれ調べてみたところ、意外に早くそれらしき資料にめぐりあえた。今月の能には特に書きたいと思う材料を持合わせないので、それを紹介してお茶を濁したい。

種は、天保十三年五月大阪の河内屋喜兵衛刊行の「宴楽小謡新大成」と題する観世流小謡本である。江戸中期以後の小謡集は、前付や本文上部に別欄を設けて、付録的な記事を沢山盛込んだものが多いが、この本もその一つで、大日本六十余州地図・当流折形之図・能面道具作物図・謡能の権輿（はじまり）・篇冠構字尽・十二月異名などを前付や頭書に付載してあるが、この頭書の中に「誦名数の事」なる項目がある。三老女・三読物など、数型によつて謡曲を分類？した特定の呼び名の解説とでも言うべきもので、呼び名を掲げ、曲名と国名を列挙しただけの簡単なものであるが、この頃ではあまり耳にしない珍しい名数も含まれている。（現行曲の国名は省略）

○**二木一草**…西行桜。遊行柳。木賊。
○**三老女**……関寺小町。檜垣。姥捨。
○**三読物**……安宅。正尊。木曽願書。
○**四　川**（し）（せん）……放生川。角田川。桜川。愛染川。
○**五　将**
田　村　定　家
源　三　位（頼政）　草子洗小町
忠　度　家　持（山城）
正　成（河内）　花　西　行（摂津）
義　経（山城）　和泉式部（肥前）
人　丸（播磨）
○**六歌仙**
○**七小町**
高安小町（大和）　伏木曽我（駿賀）
清水小町（山城）　小袖曽我
通　小　町　元服曽我
山本小町（摂津）　夜討曽我
卒都婆小町　調伏曽我
鸚鵡小町　禅師曽我
玉津島小町（摂津）　花見曽我（相模）
○**七曾我**

七小町に関寺と草紙洗が入つていないのは

≪投稿≫

――大原御幸によせる――

三村治代・

多くの人々がそうであるように私も五月鏡仙会の大原御幸に大きな期待を寄せていました。いくつかの小さな不満はあるものの、そうしたものを超えてこの能は私にとつて忘れることの出来ない数少い能の一つになりそうです。今も橋掛に立つた清麗なシテの姿が眼に浮ぶ（と云うよりも眼底にやきついている感じ）のですが、それは単に幽玄美の極致といつた概念的な言葉では表せない、謂わば私の全身全霊を奪い吸収するような美くしさでした。明瞭で潤いのあるシテの謡と、寂しみを含みながら残んの春らしい浮きやかさを失わなかつた地謡も大変楽しく聴きました。謡の美くしさを実感をもつて知ることは殆ど稀だつたのですが、地頭を始として私達と余り世代の異らない人々の謡は老大家のそれとは違つた若々しい張りがあり発声が自然で謡曲が詩であることを改めて考えさせられました。技術的に細かいことはよくわかりませんがともかく二時間余り退屈を知らないで陶然と過ぎました。中入の笛のアシライも大変印象的でした。私の友人の間には諸役の水準がこれほどの能に対して幾分お手軽なのではないかという声もありましたが、中堅層の人達の手でこれだけの

意外であつたが、これは、前者が三老女に、後者が六歌仙に、既に出ているためで、重出を避ける方針で定められたものらしい。六歌仙に西行桜を加えず、花西行などという稀曲（私はまだその詞章を見たことが無い）を持出したのも、西行桜を二本一草に使つてしまつたためであろう。番外曲からも曲を選んで、無理に数を揃えている感もしないでもない。小町物には他に富士見小町・幽霊小町・吉野小町などが、曽我物には切兼曽我・赤沢曽我・御坊曽我などがあるのに、七つに数を限定しているのは、原案者がこれらの存在を知らなかつたためであろうか。それとも七が区切りのよい数だつたからであろうか。いずれにせよ、二木一草・三老女・三読物・四川・五将・六歌仙・七小町・七曽我・八天狗……と、だんだん数が多くなつてゆくこの名数は、重出を避けていることから見ても、全体として編集されていることが明らかであり、六歌仙の構成など、知的遊戯の産物であるらしいことを物語つている。七小町にしても、共通の特色も無く、現行曲が網羅されているわけでもないから、学問的な意義は皆無と言つてよいであろう。これ以外に別な七小町が有るとしても、同じ程度の意義しか持たないものと想像している。「誦名数之事」には更に次のようなもの列挙されている。（国名省略）

○**八天狗**……鞍馬天狗・善界・大会・車僧・吉野天狗・大山天狗・有馬天狗・樒天狗。

○**十六々猩**……猩々・泰坪（たいへい）猩々・大原猩々・七人猩々・駒形猩々・二人猩々・寄合猩々・海中猩々・岩尾猩々・三人猩々・三河猩々・一番猩々・九本猩々・壺ねり猩々・紅猩々・猩々後。

○**廿番物狂**

高野物狂　加茂物狂　鞠物狂
由良物狂　隠岐物狂　相反物狂
松浦物狂　山科物語　龍田物狂
箱崎物狂　小野物狂　敷地物狂
笛物狂　枕物狂　更科物狂
鬼物狂　禿物狂　博多物狂
丹波物狂　西行物狂

十六猩々の国名を全部「唐」にしているのもおかしいし、廿番物狂に狂言の枕物狂が入つているのを見ても、杜撰な編集らしい。

なお、名数に関する解説を附載した小謡集は天保以前から有るが、遠慮九番・習十番などの曲名列記が大半で、「四川」以後の名数が、「宴楽小謡大成」の独自のものらしい。

（33・6・4）

成功を収めた得たことは名人上手が加わつたより結果から見て意義深いものと思います。但しワキと法皇が最初の予定と変つたのはいささか残念ですが。

寿夫氏の能では昨年九月、天鼓の楽で無心に舞い戯れる童の愛らしさ、十一月野宮　榊を手にした前ジテの物寂びた美くしさが印象的でしたが、平家物語に描かれた建礼門院の人間像を明確に浮き彫りした今度の大原御幸に最も深い感動を受けました。

時鳥　治承寿永の御国母　三十にして経読ます寺　という晶子の歌をゆくりなくも思い出しましたが、深い苦悩の果に仏道に安住を求めた女院の猶晴れやらぬ妄執、悲しいまでに清らな僧衣の後姿には過去の栄華が投影し花帽巾の蔭に深く感情のゆらめきを秘めた面がこれまで私の抱いていた女院のイメージに一本の強い線を与えてくれたようです。

最近の鍼仙会で不満なことが一つあります。番組に玉石混淆がひどすぎないでしょうか。特に二月の田村、四月の俊寛は少しお粗末だと思います。俊寛は背景が貧弱でシテが気の毒でした。仕舞も時々見るに耐えないものが出ますが、最も多くの人々に愛されている鍼仙会にそうした水準以下のものが現われることは大変残念に思いますので敢て苦言を呈する次第です。